

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-139	A-151	14-137 滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)		
The Alcohol Paradox: Light-to-Moderate Alcohol Consumption, Cognitive Function, and Brain Volume. アルコールパラドックス：軽～中等度の飲酒と認知・脳容積の関係		
執筆者		
Davis BJ, Vidal JS, Garcia M, Aspelund T, van Buchem MA, Jonsdottir MK, Sigurdsson S, Harris TB, Gudnason V, Launer LJ.		
掲載誌		
J Gerontol A Biol Sci Med Sci. 2014Dec;69(12):1528-35. doi:10.1093/gerona/glu092.		
キーワード		PMID
アルコール摂取、脳の老化、疫学、画像、認知機能の加齢性低下		24994845
要 旨		
目的： これまでの高齢者研究で、軽～中等度の飲酒が認知機能と正の関連があり、脳容積と負の関連があると逆説的な関連が示されている。脳容積、GCF(global cognitive function)と飲酒の関連について、3,363人の男女一般住民コホートを対象として研究した。		
方法： 質問紙を用いて、飲酒歴(全く飲まない、以前飲んでいて、現在飲んでいる)と現在の飲酒量を評価した。GCFは複数の認知症テスト結果を総合的にスコア化するものである。MRIから得られた脳容積を、頭部サイズで標準化し、定量化した。		
結果： 人口統計学的情報と冠動脈疾患のリスクファクターを調整項目として計算したところ、全く酒を飲まない或いは以前酒を飲んでいて、現在飲酒者のGCFスコアが有意に高く、またGCFは1か月の飲酒量とも関連していた。男女どちらにおいても飲酒歴及び1か月の飲酒量は脳容積と関係なかった。GCFと脳容積は、飲酒カテゴリー(全く飲まない、軽く飲む、中等度飲む等)との関係において、有意に異なっていた(交互作用 $p < .001$)。一方、飲酒量カテゴリーごとに層別解析すると、GCFと脳容積は正の関連を認めた。		
結論： 飲酒が脳の構造(脳容積)と機能(GCF)に及ぼす程度の違いは、脳容積と比較してGCFをより良い状態に保つ未知の要因があるかもしれないという事を示唆している。しかしながら、許容される範囲内であっても酒を多く飲むことは脳容積を減少させる要因となる可能性がある。		